

# 美和ダム再開発湖内堆砂対策施設モニタリング委員会（第11回）

## 議事要旨

日 時：令和5年2月28日（火） 10:00～12:00

場 所：WEB会議

### 【議事】

#### 1. 議事

1. 第10回委員会での指摘事項と対応方針
  2. 令和4年度のモニタリング調査結果
  3. モニタリング調査計画
2. 今後の予定

### 【議事要旨】

#### 1. 第10回委員会での指摘事項と対応方針

事務局説明 ■ これまでの委員会での指摘に対する対応を説明

主な意見等 ● 呑口の流木はねをきちんと補修し、できるだけ運用を停止するようなことが起こらないようにしてほしい。また、次回の運用時には流入土砂量、放流土砂量、貯水池の堆砂量、ストックヤードの放流土砂量、ダム諸量を整理して示してほしい。

→ご意見を踏まえた形で整理する。

#### 2. 令和4年度のモニタリング調査結果

事務局説明 ■ 令和3年度および4年度に実施したモニタリング調査結果について説明した。

主な意見等 ● 資料p.19について、ストックヤード投入土砂はやや還元が進んでいるように見えるが、重大な影響が出るかどうかポイント。令和3年は安全側となる洪水ピーク後の流量の多いときにストックヤードを運用したが、ピーク前の流量の少ないときにストックヤードを運用する場合を想定し、D0が低下するという仮説がどれくらい正しいか丁寧にデータをとって確認した方がいい。高速ダム下流では曝気されて分からなくなるため、その上流で検証すればよい。

→バイパス吐口等でD0観測を実施する。

- 付着藻類について、無機物率が高い要因が平常時の濁度によるものか、出水時の影響なのかが気になる。
  - ・付着藻類が一回無機物を取り込むと無機物が離脱することはなく、また濁度が高い水が流れてくると付着藻類が生長しながら無機物を取り込んでいくメカニズムがあるため、その関連で無機物率が高い理由を精査するとよい。
  - ・縦断的に欲しい地点の濁度がピンポイントであるとよい。
 →三峰川橋には過去に濁度計を設置していたが、洪水後の流路変動による干出などがあり、現在では計測を実施していない。再設置を検討する。
  - ・分析の方法としては、横軸にクロロフィル a とフェオフィチンの合計、縦軸は無機物量でプロットすると、正の相関関係があると言われている。この傾きは、出水の有無にかかわらず、平常時の濁度に支配される傾向がある。パルス的に濁度が上がるようなインパクトがあったときにその正の直線からプロットがずれるかどうかを見るとよい。詳細は個別に相談して欲しい。
 →ご意見を踏まえた形で整理し、相談させて頂く。
  
- p. 19 について、貯水池に堆砂して年月が経った土砂はその時点で還元が進んでいるため、順調に浚渫が進んで深い層から浚渫する場合は注意が必要。ここに示されているチェックをしていけばよい。
  - 令和 4 年度投入土砂は分派堰に近い上流部のものであるため、比較的新しいと考えられる。また、令和 3 年度投入土砂は表層の広い範囲から吸引したものであるため比較的新しいと考えられる。
  
- 上流側の境界条件を整理しておかないと下流で起こっていることが理解できないため、平成 30 年以降の試験運用の実施状況や高遠ダムフリーフローといったイベントを時系列で整理して、議論を進めていくとよい。
  - ご意見を踏まえた形で整理する。
  
- 現地視察での印象では、高遠ダムのフリーフローの影響で生物が大きく減少しているように感じた。夏季までに生物相が回復しているのだろうか。
  - 今年度は高遠ダムのフリーフロー期間が例年よりも長く、影響がより大きい可能性がある。融雪出水などで流量が増えると状況も変わっていくと考えられるため、次年度の出水期前に調査を行い、回復状況を把握する。
  
- 陸域植生について、裸地の面積が増加している一方で、礫河原性のカワラヨモギ-カワラハハコ群落の面積が減少していることが気になる。裸地が礫であるか泥であるかに注意するとともに、重要種が分布していないか環境情報図等も再度確認し、陸域環境での影響をもう一度考えていくとよい。
  - 定期調査などで状況を把握する。保護が必要な貴重種などの確認はされてい

ない。

- 参考資料に経年的な横断測量結果を掲載しているが、どの区間が洗堀されているか分かるので最深や平均河床高縦断図の変動も示してほしい。  
→ご意見を踏まえた形で整理する。

#### 4. モニタリング調査計画

事務局説明 ■ 令和5年度におけるモニタリング計画について説明した。

主な意見等 ● 土圧計はどこで値を確認しているのか？運用前に異常がないか確認しておくこと。

→美和ダム管理支所でオンラインデータが確認できる。運用前の土圧計の値を確認しておく。

- 植生分布調査は実施しないのか？踏査レベルでも良いので令和4年に河原性植物が回復過程にあるのか見た方がいい。

→R5での植生分布調査は予定していないが、UAV撮影写真などを活用して状況把握を行う。

- 令和3年度の試験運用結果から、現状としては大きな問題となる影響はないと思われるが、次年度の試験運用は洪水の立ち上がり時に運用し、データを確実にとれる体制で臨んでほしい。

→操作のタイミングを逃さないようにしたい。

以上